

アカデミーでの4ヶ月

タッチアップ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

野球の盛んな街、パワフルタウンに野球専門養成学校が新設。

アラサー男は、プロを夢に全力で挑む若者達を目の当たりにする…

本作はパワプロ12・サクセス・パワフルアカデミー編がベースです。

・パワプロ12は歴代のサクセスと違って、経過が一日単位で進みます。ですので、パワプロ12の雰囲気味わう為に一日が終わった際に1つに纏める形で筆記していきますね。

目次

前日談

1年前

4月1週

月

火

①

②

③

④

⑤

1

8

60

78

84

89

94

100

前日談

1年前

此処はパワフルタウン。

此処の住民は3度の飯より野球が大好き。

時には会議で意見割れした際の決定に持ち出される程だ。

そして…この街にも遂に、来年から野球専門養成施設が来年開校されるって訳だ。

「パワフル野球アカデミー…ねえ…」

おっと、申し遅れて済まない。

俺の名前は阿部。

今年で28になる、平凡な会社員だ。

そんな俺は自室のTVでパワフル野球アカデミーの情報を知った。

(野球かあ…)

俺も昔は野球小僧だったなあ…

小学4年生の時、当時の友達の家で野球のゲームにハマったのが
キツカケ…

そこで次の日から朝から晩まで練習して…

あの頃が一番楽しかったかな…

だけど、あれはいつ頃だったかな…

ある日突然気付いた。

“周り”と同じ事をしている事に。

人の心って云うんは複雑な物で、出来る様になると自分 “だけ” のオリジナルテイを創りたがるもんだ。

これが想像。社会に出て、企画・プロジェクト、時には改革で求められる大切な能力。

これはガキの頃の方が発想しやすい。純粹だからな。

だが厄介な事に、人の心…：…というか、大人て云うんはまた更に複雑で、いつ頃か自我の芽生え・知識が身につき自分の中の “常識” が確立する。

するとどうだ？

自分の中の常識にそぐわない事を、非常識と認識してしまい否定的になってしまう。

話を戻そう…

確かに俺は野球が好きで毎日練習に明け暮れていた。

だがある日、違和感に気付いた…

周りと同じ事をしている事。

皆センター返しを意識したバッティング。

無理矢理にでも真正面で捕球しようとする事。

そもそもなんで、左投げはポジションが限られたり右打ちが少ない

のか？

次の日から、俺は疑問に感じた事を解決する為、次々にやってみた。
左打ちだったのを、右打ちに。

左投げで有りながら、ファースト以外の内野守備へチャレンジし、
バツクハンドトスに隠し球：e t c.

楽しい：

疑問が解明した時の達成感。

誰もやっていない事を、俺なら出来てしまうという優越感。

初めて野球が楽しいと感じた：

が、常識から外れた俺は案の定周りから腫れ物扱い。
結果、最終的に俺は野球を辞める事となった。

・
・
・

「なるほどな…」

「ええ…今までありがとうございました…」

翌日、俺は上司に辞表を提出。

新卒で入社し、10年間お世話になった会社を後にする。

「ふう…」

悪くは無かったなあ…

だが遅かれ早かれ辞めようとは決めていた。

それが「今」になっただけ。

(さて申し込みも完了……つと)

後は後日アカデミーに訪問して契約書にサインするだけでOK。

予約が殺到しており、もう少し遅ければ入学試験というのが有ったらしく、俺は滑り込みセーフとの事。

なんでも超有名な元プロが学長らしい。

(神童裕二郎…)

名前は何と無くだが知っている…

あれだろ？レギュラーリーガーじゃ無かったか？

他にも講師等でプロが来るらしいから、勉強しねーとな。

「ッシー！」

期間は四月から七月末までの四ヶ月。

その間に生徒は実力を伸ばし、プロ入りを目標にするとの事。

だが：俺は別にプロ入り等には興味は無い。

歳も理由の1つだが、俺の目的は唯1つ。

単純にまた野球がやりたくなっただけ。

ー：退職してまで？

仕方ないんですよ：授業が平日だから両立出来ないんで。

ー：草野球でもやれば良いのに。

分かってないですね…

確かに野球の活発なこの街ならそう苦労せず草野球チームに入れ、
尚かつ仕事との両立も可能だろう。

だが、

(駄目なんだよなー、それじゃ…)

そんな安っぽい方法じゃ、俺の満足度は満たされはしない。

(やっぱ、やりてー事に金を惜しんじや駄目だよな♪)

俺の中の美学の1つ。

男はガチになる時、節約しては駄目。

良い物は高い。それは世の中全てに認識されている常識。

勿論否定的な声はある。俺も普段、買物物は低価格高品質を選び節約はちゃんとしているし、飲み会とかでも何時も割り勘。

だが分かるか？

金を「出したい」って心情を？

良い物に金を出した時の、あのなんとも言えない充実感と達成感…

分かり易く言うなら、彼女へのデート費用やプレゼントだな。

折角なら豪勢にしてやりたいだろ？

それと同じ事。

やるからかには、とことん追求しねーとな♪

「フー…」

早朝ランニングを終え、部屋でベンチプレスに励む俺。

元々筋トレが趣味、フィジカル面では不安は一切無い。

メンタルコントロールも万全。

てか、趣味で挑む俺に緊張や不安、焦り等無い。

(寧ろ若い奴の邪魔しちゃう駄目だ…)

そう、オッサンはノンビリと野球を楽しませて貰ったらそれで良

い。

別に試合は出れなくても構わない。
唯練習に参加させてくれるならな。

というより、本気でプロ目指してる子達の野球を特等席で眺めて行くのも、またオツなもんだぜ？

だがプレースタイルは変えないからな？

周りに普及とか押し付けはしないが批判は一切カット、俺の“野球”をさせて頂きますので。

なにせ自腹切ってるからね♪存分に楽しませて頂くぜ？

“大人”はワガママなのさ♪

(やべーな…)

久しぶりにバッティングセンターに来たが、遅い球が全く飛ばせない。
い。

速い球は反発で飛ぶから楽なんだが、遅い球は反発が小さいから自分の力で飛ばさないと駄目。

チャリン

(元々打撃は苦手だが…幾らなんでも酷すぎんだろ…)

思わず自嘲してしまう…

だが、不思議と気分が上限知らずに高まる…

そう…飽きて封印していたゲームを再び始めた時の様な…

入学式は丁度半年後。

今からが非常に楽しみだ…

4月1週
月

そして月日が流れ…

翌年…

「ふう…」

長かった…否、あつという間と言うべきか？

この半年、ひたすら自主トレに励んだ結果、心技体全てを自主トレ前よりワンランク上げた筈。

少なくとも、これで赤恥を描かなくて済みそうだ。

「さてさて…そろそろ向かいますか」

・
・
・

キッー！

ガチャ

愛車のSUVを敷地内の駐車させ車外へ出る阿部。
半年ぶりとなるパワフル野球アカデミー。

(うーん、良い陽射しだ)

天気は快晴。

ポカポカと暖かく柔らかい春の陽射しを全身に感じる。

(素晴らしい天気だ…)

だが余りノンビリもしては居られない。
さつさと受付に向かわなければ…

・
・
・
ガヤガヤガヤ

集合場所となるエントランスホールには、既に新入生達で賑わっている。

(やっぱり若い子ばかりだな…)

殆どがプロを目指す子ばかりなだけ有り、平均年齢はザツと見渡した感じでは18から22、3。

高校生らしき子はウインドブレーカー、大学・社会人らしき子はしっかりとスーツを着用している。

(ほー、女まで居るのか…)

水色の髪の少女と紫色の髪の少女が阿部の目に止まる。

(そー言えば、確か女も選手になれるんだったな…)

「聖…アンタ…結局練習サボってたでしょ?」

水色髪の少女がジト目で紫髪の少女に問いかける。

紫色髪の少女は、明らかに動揺を隠せていない。

「な、何の事だ…?み、みずき…?」

プニッ

「?なー!」

「ハア〜……このお腹のお肉は何?

ニート……(ボソツ)」

「う……グサツ」

「無職……」

「う……(グサグサ)ひ、酷いぞみずき……言つて良い事と悪い事が……」

「黙りなさい!はあ……」

水色髪の少女が頭を抱え込み、深い溜め息をつく。

(完璧にヘタれてるわね……まあ、そこが可愛いん……)

駄目駄目、甘やかしちゃあ!

此処は心を鬼にして……

「も〜!今のアンタじゃ試験有ったら間違い無く落選だからね!気合
い入れなさいよね!」

「そ、そんな事は……」

ギョツ

虚勢を張る紫色髪の少女の腹の肉を、突くのでは無く掴む水色髪の
少女。

「〴〵そんな事は〴〵で、何?」

「な、何でも……無い……です……」

「よろしい♪」ニコツ

(ヒュ〜、若いねえ〜)

久々に見たガールズトーク。
年甲斐もなく、癒やされちまったぜ…

ピンポンパンポン

『只今より、入学式を行います。生徒の皆様は、係員の後に着いて行って下さい』

・
・
・

ワイワイ

(入学式か…懐かしい…)
もう10年以上前だからな…

「入学式、まだ始まらないね」

「オイラ達、この学校の記念すべき1期生でやんすから、式では大歓迎して欲しいでやんす！」

「別に特別扱いはされないような…」

談話する二人の男。

小南球児と矢部明雄。

両者は同じ大学出身。

ドラフト漏れしてしまい、プロ入り最後の挑戦としてアカデミーの門を叩いた。

「あ、友沢！」

「ん？」

不意に金髪の青年を見付け気さくに声を掛ける小南。

彼は友沢亮。

小南達と同じく大学出身。

彼らとは同リーグで有り、名門帝王大学出身。

「お前も来てたんだ！」

「ああ…まさかお前達も同じとはな…」

「肘は大丈夫でやんすか？」

矢部が心配そうに尋ねる。

「フツ、一年以上前の話だぞ？安心しろ、もう痛みも違和感も無い…」

思えば、“1度目”の時にさっさと野手に転向するべきだった…

高校時代、最後の夏の大会直前に俺の肘は故障。

チームに迷惑を掛けただけでは無く、その年のドラフトも指名漏れ。俺は肘を手術後、帝王大学に進学。

進学後もしハビリの日々。

2年から復帰し、順調かと思いきや3年でまた再発…

2度目の故障で俺の投手生命は完全に絶たれ野手に転向。

最後の大会前になんとかレギュラーを奪取したが、当然完治していない肘では満足行くプレー等出来る筈無く、逆にチームの足を引っ張る始末。

結果、またしてもドラフト漏れという訳だ。

「あ、友沢。あれ…」

「ん？なッ!？」

馬鹿な…何故奴が此処に…

「みずきちゃんだ！おい、みずきちゃん!!」

「バ、バカ！よせ…」

「やっほー小南君！

？ゲッ！友沢!?!なんでアンタが此処に!?!」

「ハア…（面倒くさいのに見つかっちゃまった…）」

「ちよつと友沢！この美少女みずきちゃんを前に溜め息するってどういう意味!?!」

「そりゃあするだろ？いい年して、まだ『美少女』とか言ってるんだから…」

「な、なんですってー!」

「相変わらずだねあの二人は…」

「さっさと付き合って結婚すれば良いでやんす」

『誰がこんな奴と!?!』

「おー、息ピツタリ♪」

「そー言えばみずきちちゃん。さつきから気になったんだけど…後ろの女の子と喋ってた感じだったけど、知り合い?」

「え?あ、うん、この娘は六道聖。私の高校の時の親友♪ほら、聖。ちゃんと挨拶しなさい!」

「こ、子供扱いするなみずき!言われなくても自分で挨拶できるぞ!六道聖だ。パワフル大の小南先輩に、帝王大の友沢先輩。宜しく頼むぞ」

「あつ、こ、こつちこそ、宜しく!」

「ちよつ、オイラを忘れないでほしいでやんす!?!」

「うるさい!眼鏡!」

「グスン…」

「おはようございます。学長の神童裕二郎です。皆ようこそ、このパワフルアカデミーへ」

(あれが噂の神童さん…?)

中々の男前じゃん♪俺の次にだけど☆

『以上で、神童学長のお話を終わります』

(なるほどね…)

人を惹き付ける才能は抜群だ。

それに野球に対する思いも伝わった…

なるほど、全国の野球ファンが虜になる訳だ。

そこで、どうやら目標が七月末にアカデミー全国大会で優勝する事

…

その為に実力を付けてくれ…ね。

(わりいね学長、俺は…)

「ゲスト」だ)

言わばお客さん。そしてお客さんが施設を利用される目的は人それぞれ。

分かり易く言う例えるなら、温泉施設に行き料理だけのプラン、寝るだけのプラン、どっちもプランっと、自分に最適な内容を希望するって所かな？

そして俺の目的は…単純に野球がやれたらそれで良い。

別に練習だけで満足だし、試合は出れなくても別に良い。

そこで…真面目にはやるが、あくまで「楽しむ」為のやり方しかやらないつもり。

「勝つ」為って言うなら勿論……ね？

「大人」はビジネスとプライベートをちやーんと線引きしてるんで♪

入学式を終え、また係員に誘導され再び入口のエントランスホールに戻る阿部一行。

(なんだ？また施設案内か？)

『ではクラス分けの発表を致します。生徒の皆様は前の掲示板でご確認され、指定の教室へ向かって下さい』

(あー…そーいえば有ったなあ…)

そうそう、最初の下見の時教えて貰ったわ。

アカデミーという名の通り、此処は野球の専門学校。

つまり野球に対する専門知識を養う為の、お勉強が有るんだった…

(だがクラス分けか…)

またしても年甲斐も無く、ちよつとウキウキ気分となる阿部。

まるで学生の時に戻ったかの様だ…

・
・
・

ワイワイ。

「えーと、俺は…C組かあ。」

あ、友沢！お前と一緒だ！

「フン、俺は何処でも構わない…」

「凄いでやんす！まさかの最強コンビ誕生でやんす！」

「因みに矢部君はB組だね」

「？なツ!?オイラ仲間外れでやんすか!?!」

「てか矢部君!?!見てA組の先生!」

「ん?あ、え…あー!?!あおい監督でやんす!?!」

早川あおい…二人の恩師となるパワフル大学の監督。

「て事は…パワ大の監督、辞めちやっただ…」
「むむむ、これは後日確認でやんす！」

「聖！私達はA組ね！」

「そ、そうだな…」

・
・
・

「俺は…A組か…」

「…丁寧に五十音順なので一瞬で見付けられたぜ…
きて、名前見ても分からねーが一応他にチエツク…」

橘みずき

（名前にさっきの女の子達のどっちかだな…）

見た所、新入生で女子はあの2人だけ。

只もう1人の名前は候補が多すぎて難しい…

（最近の子は男でも女っぽい名前付けるせいで分かんねーぜ…）

聖、晶、優…etc.

ザツと見渡しただけでもコレだけ有る。

（まあ、いつか）

・
・
・

（此処か…マジで高校だな…）

懐かしいぜ…

綺麗に並んだ座席、最初に座る席は決まって最前列の一番窓側。

1学期の春は窓際の日差しが暖かく毎日居眠りしては先生に起こされ、2学期の秋は暑いと思つて学ランを脱いだら直ぐに冷えて毎度後悔、3学期の冬はひたすら寒さに震えながら勉強…
今思うと、金では買えない良さが其処には有つた…

「こんにちわ！君が一番乗りだね♪」

「ん？」

教卓の前に緑色の髪をした女性がニッコリと笑い掛ける。

「初めまして！A組担任の早川あおいです！」

非常に爽やかで純粋な笑顔で挨拶される。

「フフ…」

初めまして、阿部と申します。宜しくお願い致します」

互いに会釈し、自己紹介は皆が揃ってからと言う改めてという事で俺は席に着く。

(うう……緊張する…)

あおいの指導者人生初となる、年上の“生徒”。

プロは年功序列、大学では殆どが年下、もしくは同い年だったので然程気にならなかつたが、今回は違う…

どういった接し方、言葉遣いしたら良いのか…

(というより、なんでよりにもよつてボクの組に!?!?そういう人は渋井先生か座小谷先生の方が合う気がするんだけど…)

「あ、あおい先生!?!」

「ほ、ホンモノだ…」

「こんにちわ♪」

殆どの生徒があおいを目の前に鼻の下を伸ばす。

(ほお…このお嬢さんスゲエ人気だな…)

早川あおい…女性プロ野球選手第1号。

俺が高3の時、当時の高校野球は女性選手は出場不可だった。

だが、この早川あおいは選手として出場し、後に出場不可のペナルティを受けた。

だが、部員達の署名活動で高野連に出場を認めせ、尚かつプロへの活路を切り開いた。

そして…引退して数年経ったが、今尚これだけの人気。

俺には彼女が眩しいぜ…

(フツ、神様も人が悪いぜ?)

これは俺への当て付けですか？

半端な気持ちでパイオニアになろうとした俺への…

あ、みずきちちゃん！

「こんにちわ！あおい先生！」

例の紅“二”点の少女達が入室。

「やっとおおい先生と一緒に野球が出来ますね！」

「うん！ボクも楽しみだったよ。だけど鼻屑はしないつもり。ビシバシ行くから、しっかり着いてくるんだよ！」

「望む所です!!」

「そして…貴女がみずきちちゃんの友達の六道聖さんね？」

「はい」

「話は聞いてるよ！あのみずきちゃんのクレツセントムーンを捕れた
凄腕のキャッチャーって」

「凄腕…」

みずき…余りプレツシヤーを掛けないでくれ…

今の私にあの時の力が有るかどうか怪しいぞ？

「(う…急に甘い物が欲しくなってきた)…」

そーだ！あおい先生にも渡す流れでさりげ無く…)

所であおい先生。甘い物は好きですか？」

「え、あ、うん。大好きだよ！」

「それなら、このあんこ餅を半分こ…」ガサガサ
パコーン！！

「?はう!？」

「キヤー！」

何処からか取り出した高校の時から愛用している精神注入棒で六
道の頭を張り倒すみずき。

「全く…油断すると直ぐに甘い物食べようとするんだから…」ズルズ
ル

グツタリとした六道を引きずって行くみずきであった…

「うん、これで全員

皆、ようこそパワフル野球アカデミーへ！ボクがA組担任の早川あ
おいです！これから4ヶ月、宜しくね！」

『はい!!』

(おっ、元気な挨拶。オジサンポイント+1点だな)

「じゃあ軽く自己紹介からしよつか。

「じゃあ、最初は…其処の君から宜しく！」
「はい！俺は…」

「橘みずきです。ポジションはピッチャー！宜しくね！」
「六道聖。ポジションは…キャッチャーだ」

「え、私は阿部。ポジションはファースト、得意な事は守備です。歳は…今年で29歳ですので、恐らく皆さんよりずっと年上でしようが、どうぞ気兼ねなく接して下さい」

学生のノリのような自己紹介が済、いよいよ授業開始となる。

・
・
・
B組

「はあ…（可愛い女の子も小南君も友沢君もいないでやんす…しかも担任は怖そうな渋井先生…）」
入学早々ブルーな気持ちとなる矢部。

「ん？どーした暗い顔して!?!気合い入れて行こうぜ!!」
頭上から声が聞こえたので机に突っ走ってた体を起こす矢部。

「君は？」

「オイオイ、さっき自己紹介しただろ？」

俺は鬼塚!!ヨロシク!

で眼鏡君、君は誰？」

「アンタも忘れてるじゃないでやんすか!？」

オイラは矢部でやんす」

「がはは！ナイスツツコミ！俺達気が合うかもな？」

(面倒くさい男でやんす…うるさいし熱苦しいし…)

だが内心は少しだけ嬉しい…

他の生徒は気にも留めず退室した中、唯一喋り掛けてくれた人物なのだから。

ん？

誰も…？

気が付けば教室には誰も居なく、居るのは自身と鬼塚の二人のみ。

「鬼塚君…何で誰も居ないでやんすか？」

恐る恐る矢部が鬼塚を訪ねる。

まさか…

「ん？あー…そー言えば、さっさとグラウンドに来て行ってたっけ？…んで遅れたら地獄の練習メニューだってよ(笑)」

一瞬の沈黙の間が流れる…

「それを先に言ってほしいでやんす!!」

ガバツと立ち上がる矢部。

「てか、な、何で鬼塚君はそんなに落ち着いているでやんすか!？」

そう、未だに鬼塚は腕組みし仁王立ち状態。
その威風堂々とした立ち振る舞いに矢部は不思議に思う。

「俺か？そりゃあ…」

「敢えて”だよ♪”」

「へ？」

思わずマヌケな声が漏れてしまう。

この男、頭イッてるのか…

「俺はプロに入る為に此処に来たんだ。なら、生半可な練習なんかじゃ駄目だ。」

んで神童学長が選抜した先生の特別練習…それをいきなり教えて貰える！こんなチャンス逃してたまるかって♪」

(うわあ…ホンモノの野球バカでやんす…)

小南君もかなりでやんすが、鬼塚君は更に上でやんすね…

ピンポンパンポーン

『B組の鬼塚君と矢部君。 渋井先生がお呼びです。 至急、グラウンドへ向かって下さい』

「ッシー来たアアアアアアアア!!」

「はわわでやんす…」

モタモタしている内に遂に校内放送での名指し呼び出し。

ガッツポーズする鬼塚とこの世の終わりの様な顔をする矢部。

二人の波乱万丈な学校生活の幕開け。

C組

カキーン!

カキーン!

カキーン!

「す、すげえ……」

「これが帝王大の友沢亮……ポケモンじゃねーか」

マシンを使ったフリーバトルにて早速圧倒的な実力差を見せ付ける友沢。

(駄目だ……)

これでは大学の時の練習と何も変わらない……
足りない……全く負荷が足りなさ過ぎる……

「ッシー!準備完了!」

友沢!マシンなんかじゃヌルいんだろ?勝負しよーぜ!

クラブを嵌め、友沢の居るゲージの外側から宣戦布告する小南。

「ちよつ、お前!何自分勝手な事言ってるんだ!?!」

「そうだぜ!個人的な用なら後にしろよなア!?!」

「初日から気分悪くなる様な事するなよな!」

「お前一人の練習場じゃねーんだぞ!」

周りのザコプロ達に指摘され、自分の軽率な行動に後悔を感じ始める小南。

「す、すみません……」

すっかり舞い上がっていた……

浮かれていた…

大学時代、何度も激闘を繰り広げてきた友沢を間近にして、自分を抑えきれなかった…

踵を返し、小南はトボトボと立ち去る…

「……」

・
・
・

「トホホ…やっちゃまったなあ…」

早速チームメイトに悪い印象を与えてしまった…

「ふう…よし！投げて忘れよう!!」

塞ぎ込んででも仕方ない。過去は変えられない。

なら、投げて忘れよう！

「よし！反省の投げ込み200球！行くぞ!!」

・
・
・

カキーン！

ガッ！

「ありがとうございました！」

野手陣最後の1人がフリーバッティングを終える。

「フウー

ん？」

ザワザワ

ブルペンに人ばかり。

「おい、どろした？」

「あ、ああ…あ、あれ」

動揺する同級生。

彼が指差す先には：

「ッ！」

ビュッ！

『!』

ネットに向かい一心不乱に投げ込みする小南。

「え？あ、あれ、さっきの自己中野郎だよな…？」

「あ、ああ…」

先程小南に注意した姿とは対称的に、言葉に力が無く完璧に萎縮状態。

ビュッ！

「は、はえ…」

尋常では無い剛球を見せ付ける小南。

「な、何k m/h出てんだ…」

「わ、わかんねえ…ガンで測んなくちゃ…」

「ていうか、何者だ奴は…？」

「アイツはパワフル大の小南だ」

友沢が彼らの後ろから声を掛ける。

「パワフル大の小南…？お前ら知ってるか？」

「いや…全然…」

周りのザコプロ達は首を横に振る。

(フツ、ちよつとは大学とか見た方が良いぜ?)

150km/hを超える剛球と野手顔負けのバツティングセンス

…

奴と矢部率いるパワフル大学には何度敗戦を喫した事か…

それに…

(橘…みずき…)

友沢の脳裏に映る光景…

左のトルネードサイドから投じる高速スクリューと抜群のコントロール…

チーム力の差で4年間無敗だったが、個人の対戦成績では肉薄した状態。

性格はアレだが、アイツも間違い無く一流だ…

(フツ…)

大学時代、何度も想像はしたが決して誰にも喋っていない事…

(もし…アイツ等と同じチームだったら…)

ゴメン…母さん、朋恵、翔太…

今度こそ必ずプロになる!

だけど…ほんの少しだけ…

組は違うが、アイツ等とする野球を…楽しませてくれ…!

「ハアハアハア…」

A組生徒は初日という事で、今日は団体メニューがメイン。
揃ってランニングからスタート。

(懐かしいねえ…こうやって、集団でランニングするの…)

なんか声出しとかやってたけど、声出すのダルいからサボってたな

…

(てか、早いぞ!?)

徐々にだが、ペースを上げて行ってる生徒達。

(ちよつ、ももうちよいノンビリと!ね?)

「ゼエ…ゼエ…」

「ひ、聖…だ、大丈夫…?」

大量の汗を流し、青白くなっている六道。

キ、キツイ…

元々走るの苦手だが、まさか此処まで衰えていたとは…

「みずき…きんつば…」

「あ、まだ余裕だね♪」

・
・
・

「フウ…」

ひとまずアップのランニング、計3Kmを無難に達成。

危なかった…最近の子はランニング嫌いと聞いて舐めてたが、所がどっこい、3Km位なら余裕でこなしてしまう。

オマケにペースも早い早い。いつもは1人でマイペースに走っていたから3Kmなら大した事無いと高を括っていたが…

(やっぱガチでプロを目指す子らは違うな…)

さつきまで早川先生にデレンデレンだった顔は何処へやら、しっかりと真剣な顔をしている。

(明日からはあの女の子達と一緒に走ろうかな…)

※六道聖は1Kmでギブアップ。

「それじゃあ、今日はキャッチボールから！」

来たな。俺の復帰初キャッチボール。

「すみません、キャッチボールの相手宜しいツスカ？」

「はい、此方こそ宜しくお願い致します」

俺の相手は丁度二十歳位の青年。
丁寧な挨拶を交わし、キャッチボールの体勢に入る。

「そんじや、俺から」

ビュッ

バシッ!

(ああ…懐かしい…)

この感覚…!

ビュッ!

「!？」

ビシッ!

阿部の送球を弾いてしまう。

「ちよっ!いきなり強く投げないで下さいよ!？」

「スマンスマン(笑)」

おっと、思わず力が入ってしまった様だ…

久しぶり過ぎて、どーも力加減が…

「うんうん、皆ちゃんと基本が出来て偉い偉い♪
ん?。」

「ッ!」

シュ

バシッ!

「みずき…ちよつと遠いぞ…それに…全身が痛くなってきた…」

「?はあ?!まだマウンドとホームベースの距離位よ!?アンタキャッチャーなんだから、泣き言言わずにこれ位しっかり投げなさいよ!」
「うう…」

「あははは…(なんか…前途多難っぽいね…)」

みずきと六道のやり取りに苦笑いするあおい。

ビュッ!

バシッ!

「ッ! (手がイテエ…なんだこのオッサン…!?)」

ビュッ

バシッ!

ビュッ!

バシッ!

距離は凡そ80M程。

この距離を、阿部はノーステップ…真っ直ぐ立った状態からバズーカのような送球を投じている。

(す、凄い肩の持ち主だね…)

あおいは驚愕する。

今の阿部は、まだ上半身の力だけであれだけの球を投げれてしかも

綺麗に相手の胸元辺りへ収まり、コントロールも抜群。

(確か：ファーストだったよね?)

勿体無いなあ…外野出来ないかな?

・
・
・
B組

「うおおおお!!」

何重にも重りが付いたバーベルを担ぎ、グラウンドの外周でアヒル歩きする鬼塚と矢部。

「オラア。グズグズするな」

「ツス！」

「やんす…」

コレだよコレ…

ジム等の公共施設では狭くてさせて貰えないトレーニング。

こーゆのを期待してたんだ!!

「コラ矢部。ふらつくな。上体をしっかり起こして安定させろ」

「はい、でやんす…」

「鬼塚。無理にジャンプしようとするな。膝を壊すからな。進む時は脚を上げやがれ!!」

「はー」

『ゼエ…ゼエ…』

効いた…股関節の付け根が…太ももが…てか、全身が…

(すげえ合理的な筋トレだ…体幹をメインに限なく鍛えられるとは…)

「よし、次はアカデミーの中で雑巾がけだ。だが普通の雑巾がけじゃねえ、膝を着けずにだ」

「オ、オッスー！い、行くぞ矢部君!!」プルプルプル
「……」

・
・
・
C組

ザツ

ビュツ!

クツ

カキーン!

「やるな友沢! やっぱ変化球じゃ勝てねーわ」

「お前は速球と変化球でフォームにバラつきが有る。先ずは其処を改善しろ」

「あー、やっぱ気付いてたかあ…」

変化球を投げようとすると、どうもモーションがぎこちなくなるんだよな…

「な、なんて奴らだ…」

「今アイツ変化球って言ったか? 嘘だろ…変化球って速さじゃね…ストレートがそのまま落ちたみたいだぞ…」

「というより、アレを綺麗にセンター前へ運んで、かつクセ見切る友沢もヤベーよ…」

互いに対戦したい要望、更に両者の対決を観てみたいギャラリー。全員の意見が一致し、小南対友沢の対戦。

互いの实力を知る両者は最初から全力でぶつかる。そして周りのギャラリー達は圧倒され完璧に意気消沈：早くもC組内での実力順位、1位2位が判明しつつある。

「じゃ次、やろうぜ？」

「ああ…来い！」

ザツ

（来るか…！）

大きく振りかぶる。そして先程とはほんの少しだけフォームも滑らか…

そして最大の特徴は…まるで嬉しそうにニヤついているあの顔。

そして…奴はまだ今日、あの球を投げてない…

全てのピッチャーの基本中の基本を…

（来い！分かっている、ストレートだろ!?）

コイツのストレートは読みで打てる代物では無い…！

何も考えずにバットを振り抜く…！

「ツ！」

ビュツ！

コースは甘く、ほぼど真ん中。

だが、並のバッターでは腰が退けてしまう豪速球。

カキーーーーーン!!

「!」

高々と上がった打球はセンターフェンスを軽々と超える、特大ホームラン。

「……」ポカーン

「ハア…ハア…」

打てた…あの豪球を…

「ハア…ハア…フウ…やるじゃん友沢!」

幾ら手の内が丸裸になつてるとは云え、こうも完璧にやられるとはな…

やっぱりコイツスゲー!!

(分かったわ。やっぱりコイツに勝てるぐれーにならねーとプロには成れないって!)

「ツ! (腕がまだ痺れる…)」

痺れる両腕…そして友沢は今日一番の脱力感を感じる…

(相変わらずの豪腕だ…だがコイツですらドラフト漏れしたんだ…)

恐るべきプロとアマチュアを隔てる分厚く厚い壁…

「小南…もう少し練習に付き合ってくれないか？」

「おつ、お前から申し出るなんて珍しい。良いぜ！」

フツ、目の前に最高の練習相手がいる…

悪いが小南…少々利用させて貰うぜ？

「じゃあ、ノック始めるよー！」

「はい！」

A組の爽やかな掛け声がグラウンドに響く。

「じゃあ、まずはポジション別に並んでね」

（俺はファースト…ん、どうしようかな…）

一瞬考えた…

自己紹介ではファーストと答えたが、別に内野なら何処でも構わない。あ、バッテリーは無理。

まあ、此処は増長せず左利きの俺は無難にファーストを選ぶか。

（なにせ守備に関してはマジで練習する機会無かったからな…）

ストラックアウト等で送球は練習出来たが、捕球からの一連の動作は殆どしていない。

（まー、なるようになるさ…）

それよりも、早く試してみたいぜ…

俺の理論が何処まで通用するか…

・
・
・

「じゃあ、先ずはサードから！捕ったら1塁へ！1人10球打つから、終わったらどんどん後ろと交替！ファーストも交替して行ってね！」

「はい！」

カキーン！

バシッ！

大学2年間の監督生活で、ノックの腕格段に上達したあおい。

ビュッ

バシッ！

「うん！じゃあ、どんどん行くよ！」

「はい！」

（ん、俺が捕る番か）

守備よりも先に捕球の番が回って来た。

（これまた久しぶりだな…）

軽く足場を踏み慣らす様にステップ。

カキーン！

バシッ！

そして1塁に入り、後は捕球…と

バシッ！

（フッ、我ながら完璧…）

「ファースト！直ぐに戻る！」

「は、はい！」

「気を抜かない!!」

あちゃー、ついつい自分のプレーに酔いしれちゃった…

あらあら、早川先生カンカンだぜ。

「(ツ!) ニヤニヤしないツ!!」

わーたわーた!

フウ: ニヤついてたか:?: 俺?

・

「フウ、じゃあ次ファースト! 捕ったら自分でベース踏んで!!」

「はいー!」

阿部の怠慢を機に、普段の印象からは想像出来ない位に荒々しくなるあおい。

(あちゃー、あのオッサン完璧にあおい先生怒らせちゃった...)

しかももうすぐあのオッサンの番♪

ちよつと楽しみになるみずきである。

一体どうなるのかな♪

・

「じゃあ次...」ギロツ

「お願いします」

な、なんだ...何で睨まれてるんだ俺?

カキーン!

ドンツ!!

打球が一塁ベースに直撃、ファールゾーンを転々と転がる。

(あらら、ナイスヒット♪)

「フェアだよ!!直ぐに追いかける!!」

「あ、え、は、はい!」

またあおいに怒鳴られ、慌ててボールを追いかける。

・
・
・

カキーン!

何で…

カキーン!

何でボクは…

こんなにイライラしてるんだろう…

去年の四月、神童学長から来年開校される自身が設立したパワフル
野球アカデミーの講師としての依頼があった。

当時プロを引退したばかりのボクは、夢の女子野球設立の為の第一
歩として、指導者の勉強の為にパワフル大学の監督を務めていた。

そこで運良く小南君・矢部君の二人と出会った。

本当は臍履は良く無いんだけど…あの二人は、高校・プロでボクを
支えてくれた親友の二人に良く似ていた。

だからかな…気付けば1番長く一緒にいた…

二人と居ると元気になる…辛い事とかもへっちやらつて気分になる。

オマケに…何も出来ないボクをいきなり神宮大会に連れてつてくれた…

嬉しかった…

本当に…本当に…

そして更に嬉しかった事は、同じ女の子が野球をしていた事。聞けば彼女はボクに憧れて野球を始めたみた。

へへ、ちよつとテレるかな？

―…以上でドラフト会議を終了します。

嘘…

小南君も矢部君も…みずきちちゃんも…

指名されなかった…

―…たはは、駄目だったか―

―…プロに入るには宝クジ当てるよりもキツイって言われてるでやんすからね。だけど小南君や友沢君やみずきちちゃんも指名されな
いって…プロはマジで厳しいでやんすね…

嘘…嘘…嘘…

ガチャ!

―…あ、かんと…

気付けばボクは部室を飛び出し早退し、自宅の布団の中にいた。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

1人泣きながらひたすら念仏の様に謝罪していた…

ー…マジツスか！

ー…オイラ達がプロにでやんすか!?

ー…うん！元プロのボクが言うんだから間違いないよ♪君達二人は絶対にプロになれるよ！

う…うわああああああああ!!

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ボクはその晩、ひたすら泣き謝罪した…

―…あおい監督！俺達今度こそプロになるんで！

―…そーでやんす！小南君と一緒にパワフル野球アカデミーに入学するでやんす！

―…だから監督も頑張ってくださいね！

二人はボクを一切責めず、明るくアカデミーへの入学を教えてくださいました。

そしてボクも決心した。

今度こそ二人の夢を叶えてあげよう！

そして…一人でも多くのプロ野球選手になる夢を叶えてあげよう…と…

(それからボクも、2人の入学するアカデミーにやって来た…だけど不満な点が二つ有る…)

1つは肝心の選手で有る小南君と矢部君が違うクラスという事。

そしてもう1つは…

―…え、すみません神童学長!?

―…ん?どうしました早川先生?

―…いえ…この阿部さんって方、ボクより年上なんですけど…

―…ええ、そうですが…何かご不満な点でも？

―…あ、いえ…その…べ、別に全然不満とかは無いんですけど、その…ボ、ボクより他の先生が適任かと…

―…いえ、僕は貴女が適任かと思っただので、貴女のクラスにさせて頂きました。

―…そんな…ボク、年上の男の人にちゃんと教えれる自信なんか…
―…フツ、大丈夫ですよ。とても礼儀正しく、落ち着いた方って聞いていますので。それに…年上の人への指導も、結構良い経験になると思いますよ？

(ツ！)

カキーン！

バシツ！

定位置で初バウンドする打球をアツサリと捕球する阿部。

(ヒュー、おっかね♪) ニヤニヤ

だが捕れた捕れた♪

やっぱこつち系は得意…

カキーン！

(?・うお?!)

バシツ！

『!?!』

今度は右側に抜けそうな厳しめなゴロを滑り込み捕球。

「ツ！」

巧い…！

今の動きを見て分かったが、守備をアピールしただけあり、現時点の誰よりも巧い…

(オーケーオーケー♪やっぱ、この位スパルタじゃねーと、高い金払った意味がねーよな？ねえ、早川先生？) ニヤニヤ

(ツ！またニヤニヤしてる…！)

あおいを最大に苛つかせる要因…

それは捕球する度にニヤニヤしている阿部の表情。
人を馬鹿にしたかのような…見下したかのようなあの薄ら笑いに…！

(此处はプロを目指す子達が真剣に野球に取り組む場所…)

それを…ちよつと守備が巧いからって周りを馬鹿にしてるかの様な態度…！

許さない…

(ボクが皆を…)

(護るんだから!!)

カキーン！

バシッ!

「は、」

「背面捕り…」

頭上を抜けそうな打球を、阿部は軌道を予想し、体勢を半身にズラしジャンプ、そのまま猫の様に空中で体を延ばし、背中越しにキャッチする。

(始めっから、*“来る”*って分かっていたら、この位わけねーぜ)
だからこの技…いつ飛んで来るか分からない実践では無理。

(さあ、楽しくなって来たぜ…!)

ミットの内側をバシッと叩く。

もっともっと頼みますよ先生?

まだまだ、見せて無い技有るんで♪

カキーン!

バシッ!

カキーン!

バシッ!

カキーン!

バシッ!

規定の10球をとうに超え、阿部へのマシンガンノックは続く。
「す、」

「凄い…」

A組の全生徒が阿部の守備に感服し、釘付けとなる。

(やば、あのオツサン…高校の時の超集中モードの聖並……ううん、軽やかさ的にそれ以上かも…)

まさか聖の全盛期を知っている私が驚くなんて…

あ、だけど流石の聖もあんな凄い動きみたら流石に…

「チラッ

「ん?どうしたみずき?」

「う、ううん…何も…」

(駄目だ…全然超集中モードに入っていない…昔の聖だったらこんな時、自然にスイッチ入ってたんだけどね…)

「ゼエゼエゼエゼエ…」

ヤ、ヤバイ…

流石に…余裕ねーぞ…

なにせ守備なんて15、6年ぶりだからな。

アップのランニングと合わせて、オツサンもうクタクタだ…

カキーン!

バシッ!

ドサッ!

「せ…先生、限界ツスわ…」

遂に片膝が地面に着く…

限界の合図として、左手を前にかざし待ったをする。

「ハア…ハア…」

あおいも息を切らす…

結局…最後まで彼の顔からニヤニヤしたあの嫌味ったらしい笑みを消せなかった…

ううん、ノック中に薄々気付いた…

多分あの人は…唯本当に“笑顔”なだけ。

だって…楽しそうにしている。

心の底から…楽しそうに…

その証拠に…

パチパチパチパチ

前触れ無くの拍手喝采。

彼が皆からチームメイトと思われている確かな証拠。

結局、ボクが勝手に暴走していただけ。

(ハハハ…ボクってホント馬鹿…)

一方的な印象と憶測で彼に怒りを感じていたなんて…

後で謝らないと…

「う、うん。それじゃあ…皆の邪魔にならない様にベンチへ向かって

貰える？」

今までの怒り混じりの声から一変、若干だがいつものあおいの優しいな雰囲気の声色に戻る。

「へへへ…了解」

フラフラと立ち上がり、おぼつかない足取りでベンチへ向かう阿部。

ドサツ

あー…やば…

眠なって来た…

尋常では無い眠気が俺を襲う…

(こんなんに動いたん、久々だわ…)

もうちつと体力付けねーと…

「ん？」

「ジイー…」

「わっ!!」

「?!?」

案の定、寝ちまった俺。

人の気配を感じ薄っすら目を開けるや、目の前に有る顔と眼を合わせやいきなり大声を出され飛び起きてしまった。

「アハハハ！ねーねー！驚いた驚いた？」

小悪魔系少女が、からかって来る。

「オイオイ、心臓に悪いマネは止してくれよお嬢ちゃん？この歳になると、色々ヤバイんだぜ？」

「ゴメンゴメン（笑）」

オ・ジ・サ・ン☆「テヘツ」

おっ、良いねえ〜

こういう仕草されると、歳をとるのも悪くないって思うんだよなあ。

え、あざといって？

結構結構。

古今東西、男はいつだって、若くて可愛い女の子が好きなのさ♪

「みずき……その歳で……イタいぞ……」

後ろの少女…確か六道聖ちゃんがドン引きした反応をしている。

「ふーん、良いのかなそんな事言ってる？」ピコーン

何か悪い事を思い付いたかの様な顔になったみずきちちゃんが、聖ちゃんにズイスイと近付く。

「な、なんだみずき…?」

嫌な予感がし、言葉が震える六道。

「フフフーン………えい!」

「わっ!」

ドサツ

みずきが六道の両肩を抑え、一気に下の椅子に座らせる。

「?なー!ひ、酷いぞみずき!!今の私が1度座ったら立てなくなるのを知ってか!?!」

オイオイ聖ちゃん…何を年寄りみたくな事を…

「あれー?そうなんだー(棒)

じゃあオジサン、早く帰ろ♪」

みずきちゃんがベンチに座る俺の腕をグイッと引つ張る。

おっ、積極的なスキンシップ。好感度ポイント+1点だね。

「ま、待ってくれみずきー!私も!?!」

「へー、2人共同し高校なんだ」

「うん!私は大学に進学したんだけど聖は就職したんだ」

どういう事か、女の子二人に挟まれ結局両手に花状態となる。

いや、ナンパした訳じゃねーぞ?

寧ろ逆ナンなんだが…

「それで聖ちゃんは絶賛ニート中と…」

「ち、違う！職は探しているから断じてニートとは違う！」

「アンタそれ、半年前も言ってたよね…」

「うう…」

「何で働かないの？」

「…し、失業保険貰ってたから…段々働く気力が…」

「呆れた」

うわ、容赦無い上に辛辣…

「因みに前は何の仕事をしてたん？」

「…甘味処…」

へー、イメージ通りだなあ…

何で辞めたの……を聞くんは、まだ早いかな…気になるがもうちつと親しくなってるから…

「辞めた理由は…」

あ、言わなくても勝手に語り始めたよこの娘。

「なるほど。つまり、その店の味に納得いかなかったから改善の案を出した？」

「コクッ

「で、生意気って怒られたから辞めちゃったと…」

「コクッコクッ

ああ…可哀想に…

若者が折角より良くしようとしてるのになあ…

(これなんだよなあ…人の駄目なところって…)

人は批判は簡単に出来るが、肯定は苦手としている…
恐らく、プライドが邪魔すんだよな…

…作れもしないクセに、偉そうな事言わないでくれます？

「…ズーン…」

退職の決定付けた一言を思い出し、気分がブルーとなってしまうた六道。

「聖…」

(あちや…思い出してセンチメンタルになってるな…)

さーて、この娘の場合のケア方法は…

「そーだ聖ちゃん。これも何かの縁だ。君の料理、俺に食べさせてくれないか？」

「(！) わ、私の料理を…だが私は料理など…」

「へーきへーき♪オジサンさん何でも食うから♪楽しみにしてるよ」
「わ、分かった！美味しく出来るか分からないが、期待して待っていてくれ！」

おっ、効果有りだな。

聖ちゃんの瞳にやる気の炎が滾るのが良く分かる。

「スゴいオジサン！私がどんなに励ましてもやる気出さなかつた聖を…」

私…ちよつとショック…あはは…」

今度は逆にみずきちちゃんのメンタルが怪しくなる…

どうやら、初対面の俺が聖ちゃんを活気付けた事にちよつぴりジエラシーを感じたらしい…

うわー…流石のオジサンもめんどくせえよ…

「み、みずきは何も悪くない。悪いのは私…」

「ううん…」

あー…こーなると、今日はもう駄目だわ…

はい、こういつた時は解散解散！

「わりいね。オジサン疲れたから帰るわ」

「あ、うん！ありがとね…阿部さん♪」

「阿部……さん！明日必ず来るんだぞ！」

「オーケーオーケー、俺も楽しみにしてるよ」

女の子達に見送られながら、俺は更衣室へ逃げ込む様に脱出。

「フウー」

疲れた…

だがまあ…何だ。

結果オーライ…？

・
・
・

「フウー、友沢！帰りにラーメンでも食べてかない？」

「悪い小南。家族が待っている。先に上がらせて貰う」

「そ、そうか」

「済まないな」

「気にするな！じゃーな！」

足早に友沢は去り、小南一人だけ…

「しようがないか。急に誘ったの俺だしな。矢部君誘うか」

「……」

「や、矢部君…？」

男子更衣室で、灰の様に燃え尽きた矢部を発見する小南。

「あ……小南君で…やんすか」

「矢部君！どーしたのその姿は!?!」

「こ、小南君…このアカデミーは…き、危険で、やんす…」

ガクツ

最後の力を振り絞った矢部は、小南に忠告するやそのまま力尽きる。

「や、矢部くー…！ん!?!」

誰も居ない更衣室で、小南の悲痛な叫びが木霊する…

「ゼエ…ハア…」

場所は代わりウエイトルーム。

先の渋井のメニューに耐え切った鬼塚はまだ筋トレに励む。

（ぐっ…シャフトすら上がらねえ…此処までオールアウトしたんは初めてだ…）

全身、既に乳酸漬け状態。

気を抜くと一瞬でこむら返りの連鎖で地獄を味わい兼ねない…

「鬼塚。今日は此処までだ」

鬼塚の限界を察し、渋井が終了の声を掛ける。

「は…」

これ以上行くとオーバーワークとなる。

「明日は矢部と一緒に運動禁止だ。良いな？」

「はい…」

流石の鬼塚も精魂尽き果てており、当初の威勢の良さは消え伏せている。

(中々根性有るじゃねえか)

時刻は18時。

今日の鬼塚と矢部のメニューは13時から15時までバーベルアヒル歩き、30分の休憩の後に終了時間で有る17時までアカデミー校内を膝を着かせずの床拭きをさせた。

矢部は目を離すと直ぐにサボるが、それでも最後までやり遂げた。鬼塚は一切妥協しない姿勢に加え、更に筋トレまで行うとする。

(フツ、コイツは骨の有る奴が来たな！)

・
・
・

「さてさて…俺も帰りますか」

よっこいしよと、エントランスホールに有る腰掛けから重い腰を上げ立ち上がる。

ー…明日必ず来るんだぞ！

おっと、また顔がニヤけちまった♪

なにせ10歳近くも年下の娘に実質会いたいと言われちまったからな…

早く休んで万全にしねーと。

「矢部君…べ、別に無理しなくても…」

「ら、ラーメン…でやんす…」

「あらら、初日から張り切り過ぎだなアレは…」
「だがラーメンか…」
「悪くない！」
「久々に食いに行くか！」

「あ、阿部さん」
「ん？」

自動扉付近で後ろからの呼び声に振り返ると、早川先生がいる。

「早川先生…お疲れ様です」

「お疲れ様。スーツ…凄くお似合いですね」

素直な感想。

ビシツと着こなすシワが一切無いスーツにネクタイ。

明らかユニフォームより、サマになっている。

「これはこれはご丁寧に。まあ、ユニフォームよりスーツの方が長いんで（笑）」

「スーツの方が…？」

「ええ」

そりゃあ、そうですよ。

ユニフォームはガキ時代含めても、4年ちよい。

スーツは10年以上着てますからね。

（スーツの方が長い…）

この言葉があおいの脳裏にこびり付く。

長年野球に携わって来たが、選手がその様な事を口走るのは始めて聞く。

（あれかな？クラブチームとかで、休みの日だけユニフォーム着てた

とか)

そう納得するあおい。

というより、そう納得するしか有り得ない。

あの守備の動きは一朝一夕で出来る様なシロモノでは断じて無い。
うん！あ、それより本題と…

「…阿部さん」

「はい？」

先程から妙に神妙な顔のあおい。

「ちよつとだけお時間宜しいですか？」

「え、ええ…」

「ありがとうございます。では、職員室まで…」

あおいの後を付き、誰もいなく職員室に入る。

「どうぞ座って下さい」

「は、はあ…」

なんだなんだ急に…？

まさか…

(いや、そりゃねーだろ…) ドクンドクン

まだ出会って数時間だけ？

しかも、こんな人目の付けやすい場所で…

「今日はその…申し訳ございませんでした！」 バツ

あおいが深く頭を下げ、謝罪する。

「…どうしたんですか急に？」

思っていた事とはズレ、ちよつぱりガツカリだが、直ぐに冷静に聞き返す。

「あ、あのその…あ、ああべさ…」

「フウ…先生。深呼吸して、落ち着いて言っ頂けますでしょうか？」

「え、は、う、うん…」

フウ…それでは…阿部さんにだけ…その…キツく怒鳴ったりしてたので…」

「…あー…その件ですか。いえいえ、それは私の怠慢な動きが原因です。叱られて当然です」

俺もまた深々と頭を下げる。

「(!) あ、頭を上げて下さい!!」

うわあ…やっぱりちよつと苦手だよこの人…

なにかこう…ペースを崩されるというか…

暫しの沈黙…

「あの…そろそろお邪魔して宜しいでしょうか？」

「あ、はい！」

阿部が重い口を開け、慌ててあおいが返答する。

「申し訳ございません。明日もまた、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひします」

「あつ、はい。此方こそ…」

「では……あ、そうそう。」

早川先生、明日は六道聖ちゃんが料理作って持って来るって言うって
いましたんで、先生もご一緒に食べますか？」

「へー、良いですね。あ、ボクも作って来て良いかな？」

「早川先生が？それは素晴らしい。因みに多分ですが、六道さんは甘
い物…要はスイーツを作って来る様なので…」

「うん、ありがとう♪じゃあボクもとびっきりのスイーツ作って来る
ね♪」ニコッ

最初に見せた、あどけない笑顔になるあおい。

先生…今一瞬見せた表情、最高に可愛いですよ？

火

チュンチュン

ガバツ

「…眠…えら…」

時刻は朝8時。

授業は11時からなので、まだ猶予は有るが昨日の疲れが色濃く残る。

『おはようございます。パワフルスポーツのお時間です。本日よりセパレ、3リーグの開幕です』

「ああ、今日からか」

いつの間にかプロ野球開幕の日。

（確か早川先生ってキャットハンズだったよな…）

俺はスマホで早川先生を検索、現役時代を動画で見る。

ワー！ワー！

（凄い歓声…てか、皆“あおい”呼びか…）

こりゃ、俺もあおい先生って言った方がいいのか？

『ストライツ！バッターアウト！』

俺の見ている動画はランナー一塁に置いたが、難なく切り抜ける。

(アンダースローって投げ方だっけ？そんなに打ち辛いんか？)

まあ、俺は守備専でバッティングは苦手だがな (笑)

(しかし…やっぱ野球になると全然顔付き変わるな…)

プロフェッショナルの顔…まさにその一言。

昨日の終業後に見せたニコやかな顔とは雲泥の差だ。

「ふーん…」

・
・
・

キーツ

「到着到着♪」

2日目のアカデミーに無事に到着。

今日も空は快晴。

時刻は10時。

開始1時間前。

その間にユニフォームに着替えて教室に入らなくてはいけない。

ガチャ

「お、おはようだ…あ、阿部さん…」

「ん？」

俺を発見した聖ちゃんが、軽自動車から降りて駆け寄って来る。

「おはよう聖ちゃん。聖ちゃんも車通学なんだ」

「コクッ

「愛らしい車だね」

「む、そうか？」

「ああ、聖ちゃんに似合ってるよ」

「や、やめてくれないか…ちよっと、は、恥ずかしいぞ…」
／／／／

「そ、それでだ阿部さん…さ、早速作ってみたのだが…」／／／／
ちよつと恥ずかしそうに鞆を探り、早速綺麗にラッピングされたお菓子を差し出される。

「お、ありがとうございます。だがコイツは後で頂くぜ？実は昨日…」
俺は聖ちゃんに昨日の一部始終を話す。

「という訳で、試食は纏めてね？」

「そ、そうか…」

ちよつと残念そうな顔となる六道。

・
・
・

ガシヤン

「あ、甘え…」

早川先生がお手製タルトを、みずきちゃんが手作りシユークリームを持って来てA組全員でちよつとしたホームパーティー状態となる。

中には断末魔の叫びが聴こえたが、皆楽しそうにする。

かく言う俺は…聖ちゃん手作りの強烈に甘過ぎるおはぎに根負けし、教室を抜け出し自販機でブラックを購入し口直し中。

「……」

ブラックが微糖…いや、カフェオレレベルに感じる…

（アレはあの娘の標準レベルか？そんなら、そこらの甘味で満足する訳ねーか…）

「激甘党か…生活習慣病にならないか心配だぜ…」

「うん？お前は…」

「ん？」

自販機前で一服していると、B組の担任、渋井先生が通り掛かる。

「おはようございます。渋井先生」

「ああ、おはよう。お前はA組の阿部だな？」

「あれ？良くご存知で」

「お前が今の所、アカデミー生徒最年長だからな。イヤでも目立つぜ？それよりお前、ホームルームの時間だが、こんな所で何やってる？」

「えーとですね、口直しですね」

「口直しだあ？」

「そうです…本当はブラックよりお酒が良いんですけどね」

「なんだ？お前、酒イケるのか？」

「渋井先生が目の色変えて尋ねてくる。」

「え、ええ…ワイン派ですが…先生は？」

「俺はウイスキーだ。カマンベールをツマミに1杯…これが格別なんだな！」

「イイっすね！先生…そんなじゃ、今週末の授業終わりにどうツスか？」

俺は指でCを作りジェスチャーする。

「いいぜ！とびっきりの店を紹介してやる！」

「ありがとうございます！」

渋井先生と、『男』の約束を交わし、俺達はそれぞれの教室へ向かう。

花園も勿論良いが…こういつた付き合いも、勿論大事。
週末が楽しみだなー

一方その頃…

アカデミー寮

「スヤスヤ

此処は矢部明雄の部屋。

昨日のメニューで精魂力尽き、かつ全身筋肉痛状態。

今日は渋井直々に休みを指示され、11時を回った現在も深い眠りに就いている…

ガングガングン!!

「矢部くーん!!俺だよ!!俺俺♪」

荒々しく扉を叩き、深い眠りから無理矢理引きずり出そうとする呼び声。

「んぐぐ…」

トレードマークの瓶底眼鏡を探り当て、装置しながら不機嫌そうに玄関へ向かう。

大体見当は付いているが、一発文句を言ってやろう…と。

ガチャ

「うるさいでやんす!!」

「チイスー!」

目の前にはやはりこの男。

昨日知り合ったばかりの鬼塚。

昨日の疲れを一切みせず、爽やかな笑顔で迎えられる。

「暇だから遊ぼうぜ！」

「……」

滅茶苦茶傍迷惑な男でやんす…

朝からうるさいし、騒がしいし、自分勝手…そもそもこんなにロボロになったのは、誰のせいかと…

「遊園地に行こう！」

「はああああ!?なんで男同士でゆう…ry」

「平日だから空いてる筈だ!今日は遊ぶぞ!!」

「やんすううううう!!」

ズルズル

「とうちやーく!」

「……」

半ば強引に…いや、強制的に遊園地に連れて来られた矢部。

此処はパワフルタウン唯一の遊園地。

平日という事も有り、客入りは少ない。

「ふはー!楽しみだぜ!一人だと恥ずかしくて来れ無いんだよな」

「男二人もどうかと思うでやんすが…」

「それで、何乗るでやんすか?」

「そうだな…先ずはこの“スクワットランジ”からだな♪」

「良いで…今何て言ったでやんすか?」

震え声で矢部が聞き返す。

「今何か、嫌なワードが聴こえた様な…」

「ん？ スクワットランジ」だけど？」

矢部の顔から血の気が引く…

「嫌でやんす!!スクワットつて、また筋トレでやんす!？」

「お、落ち着け矢部君！此処はテーマパーク。そんなお客さんに筋トレなんてさせる訳無いだろ？」

「それも…そうでやんす…」

「早く行こうぜ！」

・
・
・

「フリー！フリー！」

な、なるほど…スクワットランジつてそういう意味か…

大きな広場に参加者一人一人がバーベルを担いでいる遊園地に在るまじき異質な光景。

そしてスクワット10回終わると、次はランジスクワットを左右10回ずつ行いまたスクワットへ…

そう、これは確かに「サーキット」…

小さな車に乗って遊ぶ的…

だかこのサーキットは…筋トレ用語の方…

速筋と呼ばれる瞬発力を司る筋肉群を徹底的に鍛え込む練習方法…

やり方は簡単、ひたすらダイナミックに体を素早く動かし、本来レップの間に1分近くのインターバルを開ける所を、10秒程で終わらせ直ぐに再開。

こうする事で、筋肉の伝達神経を養い素早く動かす事が出来る。

(普段ならこの位の重量位平気だが…)

担ぐバーベルの重量は10^{キロ}。

ジムのスタジオで使われ、比較的軽い分類。

だか今の鬼塚では昨日の渋井のメニューでとても下半身メニューをこなせる状態では無い。

2週目に筋肉が悲鳴を上げ、3週目にはオーバーワーク寸前。敢え無くギブアップ。

因みに矢部は1週目のスクワットでギブアップ。

「クソ…上半身なら良かったのに…」

矢部君！今から上半身鍛える為にジムに行くぞ!!」

「へ?」

・
・
・

C組。

ビュッ

カキーン!

C組は担任、座小谷のチェックの下、シート打撃中。

カキーン!

ガツシャーーン!

バッター小南の流し打ちの打球がライトフェンス直撃。

「クソ!もうちよいだったのにな!」

ザワザワ。

「ピ、ピッチャーの打球じゃね…」

「反対方向への打球なら友沢以上じゃねーのか…?」

「ナイスバッティングだよ小南」

「ありがとうございます！座小谷先生！

ッシー！守備に着こうかな…」

グラブを嵌め、ダイヤモンド内に入る。

「すみませーん！セカンドやらせて下さい！」

「え、お前ピッチャーだろ？」

「良いから良いから♪」

ザッ

「へへ、一回お前と二遊間試してみたかったんだよな♪」

「…足引っ張るなよ」

(友沢と小南の二遊間かよな…クソ！)

ビュッ

(いつまでもお前らに好き勝手やらせてたまるかよ!!)

カキーン！

打球は二塁ベースセカンドよりの鋭いゴロ。

バツ！

バシッ！

勇敢なダイビングキャッチでギリギリ捕り、素早く立ち上がる。

「ファースト！」

ビュッ！

ギョルルル！

「え…」

ビシイ

送球はファーストミットを弾き、捕球失敗。

「ぐ、ゴメンー！」

慌てて帽子を脱ぎ、謝罪する小南。

(ちよつと低すぎた…)

送球は膝下の位置…

もつと捕りやすい、胸元へ…

(なんだよ…今の送球…)

ランナー一塁の場面。

カキーンン！

三遊間を襲う鋭いライナーゴロ。

バシッ！

友沢は逆シングルで難なくキャッチ。

ビュッ！

そのまま反転し、力強い送球を二塁へ。

バシッ！

ビュッ！

ズバーン！

「イテエ…！」

「ポカーン

「ナイス守備友沢！流石だな！」

「フツ、この程度でのプレーで一々「ナイス守備」は要らないぜ？」

「ハハハ：相変わらずキザでクールな奴だな……」

・
・
・

「と、思ったがスポーツウエア着てねーから残念！がはは！」

ホツと肩を撫で下ろす矢部。

（助かったでやんす……き、早く帰って……）

「そーだ矢部君！俺のワガママ聞くばかりじゃ楽しくなさそうだし、君が行きたい所とか有る？」

「……」

まだ付き纏うつもりでやんすか……

仕方無い、この男が絶対に嫌がりそうな所を……

「そーでやんすね……有るには有るでやんすが……」

「オツケー！行こ行こ♪」

「え？けど、鬼塚君が行きそうな所じゃ無いでやんすよ？」

「いーって！いーって！俺の行きたかった所に矢部君は来てくれた！なら、俺も友達が行きたい所へ着いて行くのが筋だろ？」

いや……早く一人になりたいでやんすが……

が、仕方無いでやんす……

「分かったでやんす」

「ヨッシャー！」

「へー、ゲーム屋さんかあー」

「嫌なら、いいでやんすよ？」

「ん？全然平気だぜ！早く入ろう！」

「……」

「ほー、カードがガラスケースの中に……」

矢部の後ろを付いて行くと、沢山のカードがショーケースに入っているエリアに来る。

「……まだ売られていないでやんす……」

どうやら目当てのカードが売られて無かったらしく、レジへと向かう。

「すみませーん！この弾1箱下さいでやんす」

『分かりました！』

「へー、矢部君はカードゲームが好きなんか」

「そうでやんす。気持ち悪いって思うなら、全然帰って貰って結構でやんすよ……」

寧ろその方が楽でやんす……

「ん？何が？全然気持ち悪いって思ってないぞ？人の趣味馬鹿にする程、落ちぶれたつもりねーし」

「え…」

「定員さーん！後で俺にも、同じ箱1つお願いします」
『分かりました！』

「一緒に開けよーぜ矢部君!!」

「…」

「お邪魔しまーす!」

時刻は17時。

矢部のお誘いで、自室に招かれた鬼塚。

「うわー！これ全部矢部君が作ったの?」

矢部の自室の棚には、無数に並ぶプラモがズラリ。

「そっでやんす…」

「スゲーな！俺、絶対こーいうの無理だわ」

「鬼塚君」

「ん?」

「何で鬼塚君は…オイラにそんなに構うんでやんすか?」

矢部が遂に気になってた一言を尋ねる。

昨日会ったばかりの殆ど初対面の様なもの。

なのにこの男、積極的に絡んで来て、更に全く興味が無さそうな物
まで態々お金を払ってまで、自分に合わせようとする。

一体何故そこまでするのか…

「うーん……分かんね♪」

多少考えたが、答えが思い浮かばない。

「分からない……でやんすか……」

「そんな事より、買って来た箱開けよーぜ！」

「わ、分かったでやんす……」

また鬼塚にアツサリと言いくるまれてしまい、二人はそれぞれ購入したカードのボックスを開け、中のパックを開封していく。

「フン！」 ビリッ

「ああ!? もっと優しく開けるでやんす!」

「お、おう!」

「お。矢部君! キラキラ出たぞ!!」

「(ー!) それ……狙ってたやつでやんす……」

「そーなんか! じゃ、上げるぜ!」

「良いでやんすか?」

「いーよいーよ! 俺からのプレゼントだ!」

「うう……ありがとうでやんす!」

「ヨッシャ矢部君！ちよつと対戦しよーぜ！」

「フフフ、ルール分かるでやんす？」ニヤニヤ

「知らん!!」

「しようがないでやんすねー、オイラが教えてあげるでやんす」

「サンキュー！」

矢部の中で、鬼塚と親友になった日であった。

「ふう…ただいま、と」

誰も居ない自宅に今日も無事に帰宅。

結局お菓子パーティーが予想以上に盛り上がりすぎてしまい、そのまま教室でのミーティングで本日は終了。

(あー…お菓子ばかりはキツイぜ…)

アカデミー敷地内ではアルコールは厳禁。

代わりにブラックで口直し続けたが一体何杯飲んだ事か…

カフェインの摂取量がヤバいな…

ー…アハハハハ！

(まあ、皆楽しそうで良かったかな…)

結果的に親睦会という形となったのは吉。

オッサンからすると、若い子同士が仲良くしてるのが一番嬉しい事。

『さあ、6回表。パワフルズの攻撃は…』

時刻は20時。

バラエティー番組が終わったので別のチャンネルに変えたら、カイザース対パワフルズの開幕戦がやっている。

(カイザースか…去年のレ・リーグ優勝チームだったよな…)

日本プロ野球に3つ目のリーグ、レボリユーションリーグが誕生してから早2年…

記念すべき初代王者は、猪狩守が所属する猪狩カイザース。

対する頑張パワフルズは昨年はまたたびキャットハンズに競り負け惜しくも3位。

ザア…

エースの猪狩守はパワフルズの4番、福家が構えるのを確認し投球モーションに入る。

ビュッ!

カキーーーーーン!!

バシッイイイイ!

福家の痛烈な打球が猪狩守を襲う。

咄嗟にグラブを出す、誤って右前腕に直撃させてしまう。

うわ、痛っ…モロに直撃したぜ?

同じサウスポー同士、背筋が凍るぜ…

うずくまっただまま自力で動けない猪狩守。

直ぐにタンカーで運ばれ、ピッチャー交代、リリーフのスクランブル発進に準備中のCMが流れる。

(いや……怖いね、野球って)

明日は我が身我が身。

・
・
・

「え、猪狩選手が……」

猪狩守の退場は多くのファンに衝撃を与える。

かく言う、C組の生徒小南も彼の大ファン。

モニター越しにタンカーで運ばれる彼を見て、顔が青ざめていく。

グッ

自然に拳を強く握る……

今直ぐに安否を確認したい……

そして、出来れば自分が代わって救援に駆け付けたい。

だが、アマチュアの自分に何が出来る？

只観ている事しか出来ない自分に……

「今年……絶対にプロ入りするぞ!!」

その後試合はエースの緊急降板というアクシデントにより、カイザースは0-4で開幕黒星スタート。

福家選手は次の打席で先制となるタイムリーヒット、ダメ押しのス

リーランでお立ち台へ。

試合後のヒーローインタビューで猪狩守に謝罪の言葉を送り、勿論彼に非が無い事はファンは重々承知しており、ブーイングや野次も無く、この日は終わる…

①

ザワザワ。

翌日のアカデミーは、昨日の猪狩守の不運の出来事に持ちきり状態。

エントランスホール。

「おはよう矢部君」

「おはようでやんす小南君。昨日のプロ野球観たでやんす？」

「うん、猪今シーズン絶望の右前腕の剥離骨折って今朝のパワスポで言ってたよね」

「しよがないでやんす…去年のレ・リーグ本塁打王の福家選手の打球がモロに直撃したでやんす…」

寧ろ右腕でラッキーだったでやんすよ。リプレイ見たでやんすが、位置的にあのままだったら、顔面直撃だったでやんす…」

「うん、不幸中の幸いだったよ…」

もし顔面直撃だったらと思うと…

「はよ、矢部君!!」

「あ、鬼塚君おはようでやんす」

鬼塚も登校。

小南と鬼塚、初めての対面。

「君が小南君かい？」

「え？あ、ああ」

「俺は鬼塚！矢部君と同じ、B組の生徒。まあ、誰よりも熱い男と覚え
てくれ!!」

「はあ…」

(ホントでやんす…)

「そー言えば小南君！突然なんだか、今日の合同練習俺と一緒にやらないか？」

「ホント突然だな…」

そう、今日は週に1度の合同練習の日。

普段3クラスは、それぞれクラス専用グラウンドで練習しているが、合同練習の日は本グラウンドとなる、野球アカデミースタジアムが解禁となり、そちらで全組合同となる。

因みに本グラウンドは、普段日は社会人・クラブチームに貸し出し、土日祝日は少年野球に使われている。

「だがまあ…ああ…良いぜ!!」

ガシツ!

熱い握手を交わす両者。

・
・
・

「あおい先生！俺のピッチング見て下さい！」

「ちよつ、テメーだけ抜け駆け駆けずりーぜ!!」

「俺も俺も！」

「アハハハ…皆見て上げるから、順番順番」

あおいの周りに普段は中々会えない二クラスによる、なんともいえない悍しい集団が出来上がる。

流石のあおいも顔が引きつってしまう。

「なによアイツら…この美少女みずきちゃんはガン無視で私のあおい先生にベタベタ近付いて…」ブツブツ

「大丈夫だみずき。私が居るぞ」モグモグ

「ありがと聖。だけど何食べてるのかな？」

「ん？おはぎだが、みずきもどうだ？」スツ…

バシツ！

「？アイタ！」

「何私を買って上げたおはぎを、あたかも自分が用意した様にする訳
アンタは!？」

はあ…と小さなため息を付くみずきであった。

・
・
・

「おはようございます。 渋井先生」

「ん？ああ、阿部か」

片や孤高の渋井に唯一自分から近付く阿部。

「早川先生、凄い人気ですね」

「ああ、品行方正で容姿端麗、そんでなによりも女。 人気が有って当然
だろ？」

「ええ、同感ですね」

特に女の部分に。

「テメーも俺なんか油売ってねーで、早く練習しやがれ。

世間話は酒の時だ…」

「了解」

約束を確認出来た俺は安堵。

ミットを手に取り、若人達の元へと向かう。

とまあ、しかし…

改めて見ると立派な設備だな本グラウンドは…

外野は天然芝。

電光掲示板に観客席完備。

ダグアウトは屋内式で横殴りの雨も問題無し。

レンタル人気があるのも頷ける。

個人で借りようものなら、もれなく破産待ったなしだがな♪

「おはよう」

「あら学長。おはようございます」

背後から声が掛かり振り返ると、神童学長とご対面。

俺達はニコやかな笑顔を浮かべ挨拶する。

「どうだい？本グラウンドの印象は？」

「最高ですね…このグラウンドで思いつきり動けるって考えると、胸が熱くなりますね」

「フフツ、喜んで貰えて良かったよ」

「特に観客席の作りが素晴らしいですね」

「！」

ニコやかな神童学長の顔が少し真顔となる。

「何故？」

「ええ、よく見る観客席って背もたれも無い、横長の椅子のイメージな

んですが、此方の椅子は背もたれは勿論、椅子1つ1つが個別シートになってるのが、観客の人達への思いやりを感じますね」

俺の感想を真剣に聞いてくださる神童学長。

少しの無言の後、再び口を開かれる。

「驚いたよ…まさか生徒から、設備よりそっちを評価されるなんてね…」

「勿論、設備も素晴らしいですよ？唯、神童学長の“こだわり”を特に感じたのが椅子と感じましたので」

「フツ…そう、僕は君達生徒と同じ位に、このパワフルタウンの人達も大好きなのさ。」

皆野球が大好き、部外者の僕のアカデミー設立にも心地良く受け入れてくれて、それだけじゃ無く援助までしてくれた…

そんな優しい人達に僕が出来る事…それはちっぽけだけど、観戦される時、少しでも居心地の良い様にと背もたれを作ったんだ…」

「済まない、長話をしてしまつて。それに本当はもっと豪勢にしたかったんだけどね(笑)屋根を着けたり。だが、予算が足りなくてね」

「いーえ、大変素晴らしいお考えです。神童学長の心遣い、胸に響きましたよ」

「あはは…ちよつとテレるな…」／／／／

照れ隠しする神童。

「さて学長…それでは私はこれで…」

「あ、ああ…練習、頑張ってくれよ！」

フツ、思わず少し「素」が出てしまったよ？

②

「やしてやして…」

全体練習が始まるまでの間、自主トレに励む生徒達。

友と共にキャッチボール、トスバッティング、ティーバッティングと基本的なメニューを行う者。

ブルペンに入り、捕手を座らせて投げ込みする投手陣。

ひたすらランニングする者。

素振りする者。

十人十色の練習メニュー。

流石アカデミーに来るだけ有り、各自明白な練習目的を持ち、実行している。

(あちやー…まさかこの俺が遅れを取るとはな…)

有職時代、無駄の無いタイムスケジュールで後輩達から管理の阿部さんと恐れられた、この俺が…

まさか自分のメニューすら組めないとは…

(一体何の練習をしたら良いんだ…?)

いや、やりたいのは勿論守備。

だが、全体練習まで後一時間は有る。

かといって、ノックはして貰う相手がない…

勿論キャッチボールの相手も…悲しいね

早川先生は女の子達含めブルペンのピッチング練習、渋井先生はティーバッティングの方へそれぞれ指導中。

あの人は…確か座小谷先生だったかは、何かブラブラしてるだけ

…

仕方無い…守備の動作確認でもするか。

・
・
・

「へえー、前は5丁目のスポーツジムで働いてたんだ」ビュッ

「おう！天職だったんだけどまあ、潰れちまったんだ。それで就職
どーしようかなって思ってた所に、このアカデミーの情報を知った訳
！」

小南・矢部・鬼塚の3人は仲良くキャッチボール。

3人で三角形の形を取り、頂角に当たる矢部が徐々に離れ残りの二
人に交互に送球。

「そー言えば、矢部君から聞いたんだが神宮に4回も行ったんだろ!?
スゲーぜお前ら!!」ビュッ

目をキラキラと輝かせる鬼塚。

4回…? 矢部君、滅茶苦茶な事吹き込んだな…

「盛り過ぎ盛り過ぎ（笑）2回だけだよ、2回」

「いや、それでもスゲーぜ!!調べたら、帝王大の居る地区だろ? やっぱ
強かったか?」ビュッ

「うん、強かったよ」

心の底からそう思う…

「やっぱ俺の直感冴えてるぜ♪何か矢部君見た時からビビっと来たん
だ！只者じゃねーって！まさか神宮出場者様が同じアカデミーに居
るなんてよー！」

エキサイトする鬼塚。

「ッ様」付けてくれる程そう珍しくないぜ？甲子園は分からないけど、神宮出場者ならまだ居るよ？」

「マジ!?誰誰!!」

「俺の知る限りだと…A組の橘みずきちゃん。それとC組の友沢亮。」

「この二人は神宮…全国大会出場者だぜ」

「スゲー!!後で会ってみるぜ!!」

ビュッ!

「ちよっ!何処に投げてるでやんすか!?!」

鬼塚の大暴投。

矢部の頭上を遥かに超え、観客席に突き刺さる。

100mは軽く超える。

「あちゃ…やっちゃまった♪」

「すんげー肩…」

・
・
・

それから一時間後…

いよいよ全体練習の始まり。

先ずはシートノックから。

各選手、ポジションに着く。

一塁に着いた俺。

先ずは他のメンバーと打ち合わせ。

俺には1つの目的が有る…

「チラッ

俺の注目はアカデミーナンバー1野手の呼び名が高い友沢亮。
入学した時から噂は小耳に挟んでおり、小南との並びは攻守共に最
強との事。

特にズバ抜けた強肩との事。

これは守備好きの俺には是非とも体験しておきたい。

そして打ち合わせ内容は、友沢君の時の一塁守備。

周りは心地良く承諾してくれた。

優しいねえ皆。

「お願いします」

いよいよ友沢君の番。

先ずはシンプルな6―3。

カキーン!

初球は無難に真正面。

バシッ!

ビュッ!

「!？」

バシッツツツツ!

っ…

久しぶりにビビったぜ…

気付けばいつの間にかボールが眼前に来ていやがった…

(それにこの手の痺れ…) ビリビリ
恐ろしいノビとキレだな…

「……………」

カキーン!

次はショートの定位置から6 m程サード寄りの厳しい打球。

ズサァー

バシッ!

逆シングルでのスライディングキャッチ。

ビュッ!

バシッ!

(ヒュー…)

凄いね…

スライディングしたままの姿勢…つまり片膝立ち状態のままストライク送球を放りやがったよこの子…

普通の野手なら、まともな送球をするには少なくとも立ち上がる必要が有る。

それをこの子は…

単純な肩の強さは俺と同等…いや、それ以上か。

(ちよっとショックだな…ノーステップ送球は俺の専売特許かと思っ
たが…)

まあ、皆やってる事だけだな♪

③

く室内ブルペンく

ガチャガチャ

「わー、懐かしいー！高校の時のだよね♪」

「うむ、蔵の中から引っ張り出して来たぞ」

聖がカバンから取り出す、聖タチバナのスクールカラーのライトイエローを基調としたプロテクターとレガース。

すっかり色落ちしてしまい、剥げた白色が目立つが、眺めると在りし日の、共に甲子園を目指した日々を思い出す…

「みずき。準備完了だぞ」

「え」

思い出に耽けているみずきを、いつの間にか防具を装着し終えた六道が現実に戻す。

其処に映っていたのは、まさにあの時の六道聖だ。

「さて…大学で遊び呆けて居なかったか、確かめさせて貰うぞ」

「その言葉、そっくりそのまま返して上げるわ。」

「あおい先生！オッケーですよ！」

「うん！じゃ、始めて！」

ザツザツ

「いきなりクレッセントムーンから大丈夫なの〜？」

クレッセントムーン…みずきがあおいのマリンボールを自分なりに真似て取得した、別名クロスファイアー高速スクリュー。

「大丈夫だ。問題無いぞ」

「ほんとお？最初に言つとくけど、高校の時より遥かに精度上がってるからね？しかも聖、超集中モードに入ってるけど大丈夫なの？」

「む…それがどうもコツを忘れてしまつて…」

「何？超集中モードって？」

「あ、はい！聖だけの『特殊能力』って所でしようか？」

「何それゲームみたい!!ねーどんな能力なの？」

「ん…：…分かり易く言いますと、明鏡止水です」

「え？明鏡止水って、なんかあの…：…凄いやつだよね確か？」

「そうですね。その凄いやつです」

『…：…』

今度調べてとこ…

マスクを装着、そのまま座りミットを構える。

「フウ…」

みずきも深く深呼吸し、精神統一。

4年ぶりとなる聖との投げ込み。

しかもあおい先生も見ている。

私の…プロ入り以外で唯一叶えたかった夢…

あおい先生の前で聖が受けてくれる…

この光景をどれほど夢見た事か…！

ザア…

何千、何万と行ったこの身体を捻るモーシヨン…

だが今日は久々に、柔らかさを強く感じる！

(いっけー…!!)

ビュッ！

クククッ

バシッ！

「！」

「フウ…ナイスボールだぞみずき。言葉に偽りは無かった様だな」

昔は体全体で止めに行ってたクレッツセントムーンを超集中モードに入っていない状態でも難なく捕球。

「やっるー聖ー」

最高の笑顔を浮かべるみずき。

投げるのがこんなにも楽しい…！

(凄い…！)

驚愕するあおい。

大学時代とはまるで別人…！

聖ちゃんの存在が、みずきちちゃんの潜在能力100%引き出しているんだ…

(もし…あの娘が大学でみずきちちゃんとバッテリーを組んでいたら…)

たられはは禁物…

だけど…思い描いてしまう…

プロになれたで有ろう未来を…

「フウ…」

先ずは6ー3終了。

「どうつすか？友沢の送球？」

「ん？いやー、凄いね彼」

他の一塁手から彼の動きを聞かれ、俺は率直に答える。

「特にヤバいのが…逆シングルから180°回転してのジャンピングスローかな。空中で投げてワンバウンドで届かしたからね」

「あー、あのマジっパネエ動きですか」

流石の彼も、あの体勢ではワンバウンド送球になる。

が、逆にワンバウンドで放れるのが異常。

普通なら2、3バウンドして転がる。

あの送球をするには、地肩は勿論、空中で上体を自由に動かし、かつ安定させる為の体幹の筋力と柔軟性が必要不可欠。

(原理的にはバスケのダブルクラッチなんだよな…)

ちよつと悔しいぜ…今度バスケで練習するか。

・
・
・

「やんすうううう!!」

ズザァー!

バシッ!

怪我を恐れない頭から突っ込む積極的なダイビングキャッチを決める矢部。

(やるじゃん矢部君！俺も負けられねーぜ!!)
カキーン！

ゴツン

「？あいた！」

フライを捕り損ね、顔面へ直撃。

「だ、大丈夫か鬼塚!？」

セカンド守備に入る小南が真っ先に彼の安否を気にする。

「オーケーオーケー！平気平気♪」タラッ

「？鼻血鼻血!!」

「え？」

「？おわっ!？」

両鼻から鮮血が流れ落ち、ユニフォームにも付着。

慌ててベンチへ向かい、止血を行う。

④

「よし！次はシート打撃！投手陣も合流だ！」

ん？何だシート打撃って？

「済まない。シート打撃って何だい？」

「シート打撃ツスか？シート打撃は、要するにアウトカウントの無い実践です。だから出塁したら、走塁も有りますね」

「なるほど…」

「先ずはA組の阿部！」

あちやー、俺が一番手か…

(バッティングは苦手なんだよねえ…)

ザツザツ

室内から投手チームが合流。

「へっへーん♪スーパームイズきちちゃんのご登場だよ♪」

超ゴキゲンな橘みずき。

「みずきちちゃん、随分ゴキゲンだね」

小南が機嫌がすこぶる良さそうなみずきに声を掛ける。

「フッフ…聖と組んだ今！このみずきちちゃんがアカデミーのエースなんだから！」

・
・
・

「ブー、なんでみずきが1番手じゃ無いんですか？」

マウンド上には他クラスのそこのお前。
フェンスにもたれる様に寝そべり、頬をプクッと膨らますみずきは
あおいに訪ねる。

「あはは…仕方無いよみずきちゃん。全体練習だから、なるべく違う
クラス同士でしないとね…」

「えくくく、私阿部さんと対戦したかったなー」

(阿部さん…人気有るんだ…)

「では宜しく」

いよいよ俺の初バッティング。

右打席に入り、アカデミー支給品の木製バットを握り込む。

ザワザワ。

『あれ?』

『阿部さんって左投げだよな?』

A組の生徒は阿部を知っているので、左投げの阿部が右打席に入る
のを不思議に思う。

『ピッチャーは右だし…利き目が左とかじゃねーのか?』

確かに利き目の関係上、その可能性も有る。

だがそれを踏まえても、左投げの選手が“態々”右打席に入るメ
リットは薄い。

1つは一塁ベースまでの到達が遅れる。

2つ目は命で有る左半身が前面に出てしまい、デッドボールの際致
命傷になりやすい。

よって、メリットよりデメリットが格段に目立ち、大抵左投げの選
手は左打ちがセオリー

練習では身体のバランスを整えたり、フォームの修正の為両打ちを
するが、試合では先ず首脳陣にさせて貰えず、勝手にやろう物なら後

で懲罰物。

許されるのは、監督に認めて貰える程の両打ちの選手位…

・
・
・

「……」

スツ…

『あの構えは?!』

上体をピッチャーに正対する様に捻り、右手はバットの芯部分に添える様に持つ。

そう…バスター打法。

(あゝ、やっぱりこの構えが一番楽だわ…)

1年前…

カキーン!

カキーン!

…あゝゝゝ、しんど。

丁度100球目を打ち終え、俺は打席内で片膝を付く。

ひたすらブランクを取り戻す為にバッティングセンターで打ちっぱなしに明け暮れた毎日…

元々苦手だが、そこそこ当たる様にはなった。

するとやっぱり…

そう!作りたいくなるよな、オリジナルフォーム♪

結局の所、辿り着くの此処なんだよな♪

ネットで検索し、一般的なフォームからプロのフォーム、俺のインスピレーションを活かしたオリジナル打法。

色々試してみた。

そして…

…いやっぱこれかな？ 楽だし、使用者少ねえし。

俺にしっくり来たのはバスター打法。

オリジナルという訳では無いが、プロアマ含めて使い手が少ないのと、後構えが非常に楽だったのが採用の理由。

実際色々なフォームを試したが、最終的には最初の構えでバットを上げっぱなしにしているのがシンドイ事に気付く。

俺の理想は無駄な力が入らない、リラックス出来たフォームだからな。

なら次に神主打法と呼ばれる自然体で構えたフォームも試したが…却下。

なんか色んな人がやっているから面白くない。

そして自己流のオリジナル打法も試したが…まあ、アレだ。飛ばない、当たらない、打てない。

テイクバック無し of 超コンパクトなノーモーション打法とかやってみたが…やっぱ根本的に弄つちや行けねえトコは有るわ。

結果、俺はバスター打法を採用。

時は現在。

慣らしたバスター打法をお披露目したのは良いが…

今現在、たった2球で追い込まれピンチ到来。

初球のストレートは空振り、2球目のカーブも空振り。

やっぱマシンと違って人の投げる球は、配球、コントロール、フォーム、球質…

様々な要因が重なり、まあ打ち辛い事。

しかも彼らは同じ立場と云えど、俺と違って長年野球に携わって来た歴戦の戦士。

夢に費やした時間は俺の比では無い。

(全くタイミングが合っていない…これは頂き！)

C組のピッチャーは勝ち誇る。

明らかなボール球でも全部振りに行っている。

次はストレート。

カーブを投げたなので、あの様子だと緩急に反応出来まい…！

「フウ…」

一旦深呼吸。

慌てるな…俺は別にプロを目指している訳でもレギュラーを目指している訳でも無い…

俺はあくまで「ゲスト」

そう…打てなくても良い。

評価が下がろうが関係ない。

唯…野球を楽しむ、それだけ。

「ツシー…」

ついつい忘れていた「楽しむ」気持ちを思い出し、俺は再び相手

ピッチャーと合間見える。

(そんなソワソワしなさんな？ 楽に行きましょ楽に♪)
どうやら相手の子は次で俺を仕留めるつもり。

その証拠に、何度も体を小刻みに動かす。
投げ急ごうとしすぎだぜ…？

再びバスター打法の構え…
だが先程より脱力を感じる。

ザア…
ビュッ

(真ん中高め！)
カキーンン！

「なッ！」
嘘だろ…さつきまで来る球構わず全部振り回してた筈が…!?

センター前へポトリと落とす。
練習でだが、阿部の記念すべきアカデミー初ヒット。

⑤

「あ、ナイスヒットだね阿部さん♪」

「ありがとうみずきちゃん」

ダッグアウトに戻る俺を笑顔で祝福してくれるみずき。

「うむ…阿部さん、みずき。」

済まないが、今の結果内容は喜べたものではないぞ」

喜ぶ二人に聖が釘を刺す。

「ちよつと聖！アンタ水差す事を言わなくて…」

「いやみずきちゃん、聖ちゃんの言う通りだ。」

あれじゃーなあ…」

それもその筈、明らかマグレな当り。

というのも、自分でも分かったがタイミングの取り方がめっちゃくちゃ。

初球のストレートには完全に振り遅れ、2球目の変化球には初球のストレートの印象が有ったのか逆に早く取り過ぎたせいで、踏ん張りが出来ずまた空振り。

そもそも、本来バスター打法はあんなフルスイングする様なフォームでは無い。

もつとシャープに振り抜き、ヒッティングに重点を置いたフォーム。

「次、六道！」

「私の番か。では、行って来るぞ」

聖ちゃんもまた、アカデミー指定の木製バットを握り締めバッターボックスに向かう。

「ベー！三振しちゃいなさい！」

「まーまーみずきちゃん。俺は気にして無いから仲良くね？」

「アハハ！ジョーダンだって阿部さん！」

阿部さん真にしちやってウケる♪

それに、あの娘が簡単に三振しちゃうと思って？

ざくんねん♪聖はバッティングも凄いんだから！

長打力は無いけど、選球眼とミート力はそこらの男子に負けて無いからね♪

ブランクが無ければの話だけど。

・
・
・

『ストライツ！バッターアウト！』

「グスン…」

あらら。

三球三振、秒殺だったなー

ベンチ最奥に座り込み、暗く落ち込む聖ちゃん…

あおい先生とみずきちゃんが慰めに行く。

俺はそつとしよう…

今の俺が喋り掛けるのはナンセンス。

・
・

「次、鬼塚！」

「よっしゃ！俺の番だ！」

気合十分の鬼塚。

「ピッチャー交代！小南！」

「はい！」

小南VS鬼塚。

（ん？鬼塚？）

「鬼塚」という単語に聞き覚え有る阿部。

（…確か俺が通ってたジムのスタッフの子じゃ無かったか…？）

後で挨拶してみようか…

もし人違いだとしても、損は無い筈。

ザッ

向き合う両者。

鬼塚は左打席に入り、高々とバットを上げる。

（早速小南との対戦か…！）

全力で行くぜ！！

ザッ

オーソドックスなウィンドアップモーションの小南。

そこから…

ビュッ!

「?なッ!」

ズバーーン!

『ストライツ!』

唸りを上げる豪球に全く反応出来ず見逃す鬼塚。

「すげえな…」

ダッグアウトから見ても速すぎて分からねえ…

これが噂に聞く、小南球児のストレートか…

「また速くなってるわねアイツ…」

あおい先生、小南君何キロ位出てるんですか?」

若干の嫉妬混じりにみずきがあおいに訪ねる。

「どうかな…確か大学の時のMAXが154Km/hだったけど…」

ヒュー、おっそろしい♪

盗み聞きしてした小南球児の球速に感服しちまう俺。

(150超えとかプロ並みじゃねーか)

そんな奴がなんでアカデミーに…?

まあ何はともあれ、これははっきり目に焼き付けてとかねーとな。

(速い…速すぎるだろコイツ…!)

神宮出場は伊達じゃない。

バッセンの160を見た事有るが、まるで別格…

(これが同じ人間が投げる球かよ！)

ザッ

「ツ！」

ビュッ

クッ

(まがつ…)

ズバーーン！

『ストライツ！ツ！』

自身に食い込んで来る変化球に腰が引けてしまったが、ストライク
宣告。

(あ、あの速度で曲がって来やがった…)

「へっへー！追い込んだぜ鬼塚♪

どうした？フォームだけは威圧感有るけど見掛け倒しか？」

「ッ…！」

小南の挑発に1度打席を外す。

ブオン!!

『!?!』

魂心の素振りを披露。

マウンドまで届く風斬り音を轟かせ、再び打席に戻る。

(やるな…！)

スイングスピードから察するにパワーだけなら友沢以上。

ザツ

(そう来なくちや…)

ビュツ！

(面白くねーぜ！)

クツ

ズバーン！

『ボツ！』

一瞬ピクリとバットが動くが見送る鬼塚。

打者の手元で小さく落ちたボールは僅かにストライクゾーンから外れボール。

一見見切った様に見えるが、只反応が間に合って無いだけ。

鬼塚の圧倒的不利に変わり無い。

(あつぶねえ…)

首の皮一枚残った…

まだだ…

まだ負けてねえ!!

ザッ

(最後だ!!)

ビュッ!

ズバーーーーン!!

『ストライツ!バッターアウト!』

全力のストレートを真ん中高め一杯へねじ込む。

鬼塚の魂心のフルスイングも敢え無く散る: